

ライフワーク「工業英語研究会」

中田邦男

先だって、前川さんのお便りで、徳永さんが本年3月にお亡くなりになったのを知りました。いつもは年賀状を頂いているのに、今年は1月になってから、ご長男の研一さんが代筆(?)のご挨拶を頂いて、些か不審とは思っていたのですが、お見舞いにも参上せず失礼をお許してください。

徳永さんについて申せば、何と云っても「大阪工業英語研究会」の創始者、講義録の編集者、長年の古老、名誉会長、等々の言葉が思い浮かんできます。

しかし、それらの言葉から連想されるようなイカツイ感じは全くないお方で、いつも温厚な親父のような感覚の人だと思っています。教室では、いつも中央最前列の机(徳永さん用の特別席)にお座りでしたね。しかし、口角泡を飛ばして(?)議論している者どもを尻目に、どちらかといえば、ニヤニヤ笑ってられるような気配でした。

帰り道の喫茶店などへの脱線の時でも、どこかに愚痴をこぼしたり、意地の悪い冗談を言ったりする者がいても、むしろ飄々とあしらわれて拍子抜けするような感じ！人間、内と外とは違うことがよくありますが、徳永さんの場合も、あの「工業英語研究会」に対する情熱、あれだけ続いた講義録編集への執念、辛抱強さ、気迫は、外からはなかなか判りません。

徳永さんについては、意外とも、また、特に強い印象に残っていることが一つあります。それは、何時だったか、白浜での研

修のあと、串本の方へ見物に行ったことがありましたね。串本では、橋杭岩—水族館—灯台などを回りました。

あの灯台の横か何処かに「南方熊楠記念館」だったか何だったか名前を忘れましたが、そんな記念館みたいなものがありました。我々凡人は、そんなものには興味がなく無いというよりは恥ずかしながら「南方熊楠」が何者なのかもよく知らずに灯台の方へ急いだものでした。

私にとっては、正直なところ、あの有名な筈の熊楠の名を知ったのはあのときが初めてです。徳永さんが、なぜ熊楠の名を口にし、記念館の方に行かれたのか判りませんが、知らずに見向きもしなかった自分が恥ずかしく思います。

その後、ニュースや何やかで熊楠の名が話題になりだしてから、ボツボツ判りかけてきたものです。今でも熊楠の名を聞くと徳永さんを思い出します。時には、重なり合った同一人物であるような錯覚さえ覚えるときもあります。

熊楠は一種の奇人だったそうです。徳永さんは、温和とは言えても奇人とは言えません。理屈ではつながらない人同志なのに、私の場合には、いつも一緒になるから困りものです。

いろんな点で我々の先達であった徳永さんでしたが、米寿になるまでお仕事をなさっていられたことも、我々への激励の一つでしょう。徳永さんからご覧になればまだ若造、まだ老化し朽ち果てるわれにはいか

ライフワーク「工業英語研究会」
ないと思うのです。と同時にまた、徳永さんのお年までは、まだまだ、少なくとも働けるという激励を受けるのです。

「工業英語研究会」は、徳永さんにとっては一種のライフワークだったのかも知れません。私には、それほどの目標がないのが申し訳ありませんが、徳永先輩のお年くらいまでは是非ボケずに頑張りたいものです。